

## 遥拝の構造 (五)

— 遥拝と都市計画 —

A Study on Bowing Direction in Japan (5):

上田 篤  
UEDA Atsushi

### 目次

- 一 海と若狭の神々
  - 1 若狭 2 開拓神 3 神体山 4 雨乞山 5 神領 6 当山
  - 7 神島 (以上 1 4 号)
- 二 ムラとヤシロ
  - 1 美浜 2 旧山東村 3 旧耳村 (以上 1 5 号) 4 旧南西郷村
  - 5 旧北西郷村 6 いくつかの知見 (以上 1 6 号)
- 三 島から海辺そして内陸へ
  - 1 太陽 2 寄りくる神 3 伊豆を一周する 4 伊豆を縦断する
  - 5 御島の神 (以上 1 7 号)
- 四 遥拝と都市計画
  - 1 近代都市計画とは何か 2 町を貫く見えないシステム 3 「歴史の森」
  - 4 「自然の森」 5 「社会の森」 6 鎮守の森には何かがあるか
  - 7 墓を拝む 8 山を拝む 9 海を拝む 10 海から拝む
  - 11 岬宮から田宮へ 12 ニライカナイを遥拝する 13 都市の聖軸

### 一 近代都市計画とは何か

わたしは、大学で三〇年あまり都市計画を教えているが、ずっと一つの悩みをかかえてきた。というのは、大学の学部の三、四年生にたいしては、日本の法定都市計画を教えている。ところが、大学院のゼミの学生にたいしては、このような法定都市計画は日本の都市の現実に合わないで早くつくりかえなければいけない、と話す。つまり、ひとりの教師が、学部の学生と大学院の学生とではぜんぜん反対のことを教える、ということをして、三〇何年間も続けてきているのである。

どうしてそんなことをするのか、というと、学部の学生は多人数の講義であるから、あまり複雑なことを教えることができない。学生が疑問をもっても、教師と対話することができない。それにたいして大学院では小人数のゼミであるから、徹底的に討論を戦わすことができる。わ

たしの私見や私論も題材にできるからである。それにまた、学部の学生には、まず現行の都市計画を教えないと大企業などの就職試験に落ちこちてしまう、ということがある。落ちこちた学生を私は救済することができない。いっぽう大学院の学生は、どの道、大企業などへの就職の当てがない。であるなら、始めから本当のことを教えて、ゆくゆくは一匹狼の建築家にでも、あるいは学者にでもなるがよい、と考えているからだ。

では、本当のこと、すなわち現代の都市計画にたいするわたしの疑問は何か、というと、一口にいて、それは都市というものをすべて人工的にコントロールしようとする姿勢にある。もちろん、都市にもあるていどのコントロールは必要であるが、しかし、なにもかもコントロールしようとするとう無理が生ずる。現行の日本の都市計画は、基本的にはゾーニング制によって全体的にコントロールしようとする。そしてそこに、いろいろの無理が生じている。たとえば現行の日本の都市計画には用途地域制というものがあるが、そのばあい、住居専用地域を例にとると、ほとんど住居だけしか建てられない。レストランや飲み屋、あるいは自動車整備工場といった生活に密接に関連するものも、しばしば置くことができない、それはちょうど、フランス式庭園の計画に類似している。フランス式庭園というのは、ここはバラ園、ここはチューリップ園、そしてむこうに円錐形に整形されたイチイの列、それを取りかこむツゲの大刈込みなどというように、植物はみな同種のもものがまとめられて配置されている。たしかにその計画では、植物がお互いに争わないようにグルーピングされ、日照、土壌等に適合するように考慮されている。しかし何より、そこでは幾何学的あるいは人工美的観念が優先されている。

どうように近代都市計画でも、ここは住宅地、ここは商業地、むこうは工業地というように、町を純化し、特化することをもって機能的とし、美的としている。ところが、日本の町は、もともと住、商、工などの家々が混在していたので、なかなか、おもうようにきれいに純化や特化ができないで困っている。

しかし、問題はそれだけではない。というのは、純化や特化できないだけでなく、じつは純化や特化をするのがいいのか、という疑問がそこにはあるからだ。もちろん山の手の住宅地のように、すまい一色に純化されて人々の憧れとなるような町も結構である。しかし、そういう町ばかりになってしまうと、何をすることも自動車に乗っていかなければならない、ということになる。町は森閑として人通りがなくなり、そういうところで犯罪がおきても、誰も助けにきてくれない。それだけではない。町の機能がなにもかも純化されていくと、つまり同種のものばかりになると、町は刺激を失い、しだいに活気を失ってゆく、という問題がある。そこで、フランス式庭園でも、たえず水をまいたり、肥料をやったり、雑草を抜いたり、刈込んだりする。そうしないと、同種ばかりが集まった植物は枯れてゆくからだ。ところが、町ではなかなかそこまで手が廻らないために、いままで汚かった闇市のような町が再開されると、たしか

にきれいにはなるが、しかし、夜六時になるとみないっせいに店を閉めてしまい、森閑としたコンクリートの塊になって、町が衰退する、といった事例を各地にみるのである。

いっぽう、かつての都市には、山の手のように純化された町だけでなく、雑然とした下町というものがあつた。そこには下町の良さというものもあつたのである。第一、そこではいつも人通りがあつて町は安全である。また老若男女をはじめ、いろいろの職業の人がいて、何かにつけて便利である。子供たちの生きた教育にもなる。それに人々の生活の匂いがあふれかえつていて、よそよそしさが無い。親しみがもてるのだ。それはフランス式庭園にたいするに、日本の鎮守の森に似ている。大木も、中木も、低木もあつて、さらに各種の草やシダ、コケ、地衣類などをも含み、それらが全体でひとつのコミュニティを構成している。お互いに違う種でありながら、なかには共棲関係も見いだされるのである。そして日本の都市は、さきにものべたように、だいたいにおいてこの鎮守の森のように下町的なものだった。ところが今日の都市計画では、この下町のごちゃごちゃした家や店が混在しているのを悪いものだ、と決めつけ、それらを機能的に分けることが近代的な都市計画だ、としている。もちろん、混在しているための具合の悪さ、ということもある。しかし、その具合の悪さをなくすために、すべてを空間的に別々に分けてしまわなければならないのか。ほかに方法はないのだろうか。昔の下町でも、喧騒の表通りを一步入ったら、ひっそりとした仕舞屋しまたやが並んでいて、三味線の音など聞こえてきたものである。子供たちの遊ぶ声などもしたものだ。そういうように、通り一つで生活を分ける、というような、いいかえると、いろいろな施設が混在していても細かい空間のデザインで問題を解決する、というヒューマン・スケールの町というものは、もう実現不可能なのだろうか。近代都市では、そんな細かいシステムまではもはや考えられないのだろうか。そのところが、どうにも、わたしには納得できないのである。

## 二 町を貫く見えないシステム

もう三〇年以上も昔のことになるが、わたしははじめての海外旅行で、カナダ、アメリカ、メキシコを訪れた。そのメキシコに、タスコという銀山の町があつた。世界各地から、銀の採掘をめざしてやってきた人々でつくられた町である。その町は、丘の上にある。丘をあがってゆくと、道が曲がりくねり、まるで迷路のようである。いろいろな形をした住宅、庭、階段、スロープ、それに可愛い店舗やレストランなどがつぎつぎと現われては消える。おもいがけない場面におもいがけないものが出現したりして、なかなか退屈しない。一見すると、カオスの町なのに、迷路やカオスにとまなう煩雑さや恐ろしさというものが無い。むしろ面白さや親しみやすさのもてる町だ。いったい、こういう面白く、親しみやすい町を誰がつくったのか、誰

が都市計画をしたのか。わたしは何とかその辺りのことを知りたい、とおもった。

その町に泊った次の日の朝、わたしは、丘の一番高いところにある教会の塔にあがって町をみおろしてみた。すると、その景色は窓々のオンパレードであった。つまり多くの家々の窓が、みな教会を向いているのである。どの家も、みな教会を向いている窓をもっている、といってもいいぐらいだ。

そこで、そのわけを地元の人に尋ねてみた。するとこういうことだ。この町は、昔からいろいろな国からいろいろな人がやってくる。言葉も習慣もみな違う。しかし、今日のように情報が発達した時代ではないから、なにかも教会が中心になった。人々は毎朝起きたら、まず窓を開けて教会を見る。教会のほうでも、何かあるときには信号を出す。祝日や結婚式には旗を揚げる、葬式があるときは半旗である、非常のときには黒煙を出したり、半鐘を鳴らしたりする。また時刻は鐘を撞いて知らせる。であるから、各家々は、みな教会を見る窓をもっていなければならない、家を建てるときには、教会の見える窓を必ずつくらなければならない、後から家を建てる人も、前から住んでいる人の家の窓から教会に向く視線を邪魔しないよう建てなければならない、というのである。つまり教会は情報センターであり、その情報センターを向いている人々の視線をたがいに尊重してこれを犯さない、という社会的ルールが存在するのである。

これは素晴らしいことだ。つまり、一見、混雑した町にも、じつは暗黙の社会的ルールがあって、それがあつたために、迷路のような町だ、とおもっても、どこか芯の通った落ち着きがある。けっして乱雑でめっちゃめっちゃな町ではない。つまりカオスのなかにもシステムがある、ということなのである。

これは、今から三三年も昔のメキシコのある小さな町での体験である。そのときわたしは、まだヨーロッパの都市を見ていなかった。もしイタリアの山上都市などを見ていたら、それほど感心しなかったかもしれない。しかし、そういうものを知らなかったために、わたしはたいへん心を打たれてしまった。もっとも、イタリアの山上都市を見たのでは、これほどの感激をうけなかったかもしれない。というのも、それらは何百年という歴史をもった、すでに歴史的存在だからだ。したがって町にはタスコほどの活気はない。それにたいして、タスコは比較的新しい。現在もなお新陳代謝して活気する現代都市なのだ。

わたしはそれから、日本のごちゃごちゃした町にも、なにかこれを貫くシステムがないか、とずっとかんがえつづけてきた。そこで、おもいあたるのが「鎮守の森」である。日本の集落のなかには、かならず鎮守の森があつて、毎年、そこで祭がおこなわれる。かつては集落の生活の中心だった。しかしいまはそうではない。せいぜい正月とか祭のときなどに人が参るぐらいのものである。それでも、それらは失われずに残っている。これから、まだ残るだろう。

とすると、ひょっとしたら、鎮守の森が、カオスの町の秩序を維持する一つの「見えないシステム」として、もういちど蘇ってくる可能性があるのではないか。もしその可能性がすこしでもあるのなら、わたしはそれを徹底的に探してみたい、とかがえた。そして鎮守の森研究をスタートし「日本の都市の聖なる空間」を求める三〇余年のわたしの探求の旅が始まったのである。

### 三 「歴史の森」

わたしは大阪で生まれた。その大阪市内の上町台地に親戚の家があったので、小さいとき、母につれられてよくその親戚の家を訪れた、そして従兄弟と一緒に上町台地界隈で遊んだ。その上町台地に、生国魂神社の森がある（写真1）。そのあたりで育った作家の織田作之助は、この生国魂の森界隈を「木の都」と名づけたエッセイを書いた。大阪というと、当時は「煙の都」といわれたものだが、織田にとって大阪は「木の都」だったのだ。それは、わたしにもよくわかる。ヤシロだけでなく寺も何十とつづいている。すぐ隣には真田山という森もある。その先には大阪城も見える。このあたりは緑がたいへん多いのだ。現在に残る地名をみても、森の宮、桜の宮、茶臼山、勝山、夕陽ヶ丘、桃谷、清水谷、細工谷、谷町などつづいている。それは、かつての自然地形を彷彿とさせるものだ。



写真1 生国魂神社の森

さて、この生国魂神社の森については、いまから一三五〇年も前に、仏教を信奉していた孝徳天皇がその木を伐採した、という記事が『日本書紀』にある。「天皇、生国魂神社の木を切り賜う」と『書紀』の史官は天皇を批判するように書いている。國史に書くぐらいだから、当時、よほど大きな森があったのだろう。その緑は小さくなり、場所も多少変わったけれど、なお現在に残っている。今日の大都市のなかに、巨大な森を形成しているのである。

鎮守の森が、いつごろから形成されだしたか、という研究は、わたしの知るかぎりではあまりない。したがってその起源もよくわからない。ただ昔は、神社はしばしばモリとよばれて古くから存在していたようだ。また文献上、國によって神社が始めてつくられた、とされる崇神天皇のころには、すでに民間には広く存在していたようだ。古墳時代のことである。崇神天皇

は実在した、とおもわれる最初の天皇、あるいは大王である。さらに弥生時代に遡る可能性もある。じっさい『常陸国風土記』には、農業を生業とする人たちが、山の麓に杖をたてて神社とし「ここより上は神の地とし、下は人の地とする」と書かれているからだ。先住民である縄文人たちを追い出し、そのあとに弥生人たちによって、鎮魂の場所として建てられた可能性がある。

するとこれは、二〇〇〇年も昔に遡る話となる。じっさい、今日でも、鎮守の森は、五〇〇年、一〇〇〇年、なかには二〇〇〇年も昔からあった、とおもわれるものも残っている。そして、今日、その数は一〇万あまりといわれる。しかし、途中で何回かその改廃の危機があった。仏教が栄えた孝徳天皇のころもそうである。「文明開化」の明治のころはとくにひどかった。そしてこの国土総開発の現代もそうだ。それでも、なお各地に緑の森が残っている、ということは、現代の奇蹟の一つとっていいのではないか。

このように鎮守の森は、歴史的な存在といえる。したがって、鎮守の森は「歴史の森」ということができるのである。

#### 四 「自然の森」

わたしは、現在、京都の近くに住んでいる。その京都の北のほうに府立植物園がある。広大な敷地で、なかにはいと、樹林のほかにも、芝生、花壇、大温室、フランス式庭園などがあって、これはもう立派な公園である。なかに広場もあり、春になると桜の下で人々がさんざめいている。もちろん、この桜も研究のために植えられたものである。そのために一大桜林となっている。ほかに梅林、椿林などというように、いろいろな木がゾーニングされて植えられている。

しかし、かんがえてみると、これらは「自然」ではない。自然でないのも当然で、これらは研究上の目的のために、人間によって植えられたものであるからだ。だから樹種ごとに林をつくっている。もちろん自然にも林はある。だが、これらとはすこし雰囲気が違う。というのは、ふつう林といわれるものも、たいていは二次林、すなわち人間が植えたものであるが、そういうところにも、さまざまの草や木などが生えているからだ。しかし、ここではそういうことはない。ただ目的とする木と、あとは土だけである。すると、こういうところには、草も生えていないから、虫もあまりいない。鳥もこない。鳥はなんのためにくるのか、といえば、ただ鳴きにくるのではなく、虫をとったり、木の実をついばんだりするためにくるのであるから、虫もいず、木の実もなければ、鳥もこない道理である。そうすると、草もなければ虫もいない、鳥もいない、ということころを、はたして「自然」といえるのだろうか。

もちろん植物園だから、つまり実験場だから自然である必要はない。個々の植物の形が分かればいい、というのであれば、これでいいのだろう。しかし、この府立植物園は、植物園であるとともに、実際には京都の一大公園として機能している。休日にはたくさんの人々が植物の形を見るのではなく、ただ楽しみのためにやってくる。すると公園としてみたとき、やっぱりこれ



写真2 半木神社 京都府立植物園の森

は「自然」ではない。たまたま、公園の例として京都の府立植物園を出したが、そのほかの公園はもっと「自然」ではない。そこにはたいていスベリ台やブランコや、野球場などがおかれているからだ。じっさい、わたしたちの身近にある公園のなかで、鳥や蛙の鳴き声を聴くことができるだろうか。トンボや蛍が飛んでいたり、鈴虫やコオロギの声に接することがあるだろうか。まったくない、とはいわないが、非常に稀ではないか。そういう意味では、公園もまた、わたしたちが感ずる「自然」とはおもわれないのである。

ところで、この植物園を歩いていると、一個の鳥居にぶつかる。府立植物園という公的施設のなかに鳥居がある、ということに奇妙な感を覚える。そこで鳥居をくぐってなかに入ってみる。すると、池があって、その奥に小さな社がある。<sup>なからぎ</sup>半木神社という（写真2）。その神社の廻りをとりまく緑は、森である。あるいは雑木林である。植物園のなかにありながら、ここにはいろいろな木が入り交じっている。神社は、いっばんに喬木の樹林のほかに、灌木も、下草も生えている、シダやコケ、地衣類などもある。昔からの植生をそのまま伝えている。生態的な自然のあり方を示している。半木神社もその例外ではない。そしてここへくると、はじめて植物園のなかで鳥の声をきくことができる。春には蛙が、秋には虫が鳴くことだろう。つまりここには、植物だけではなく動物もいるのだ、とおもう。やはりそれが自然の姿なのだろう。

そこでわたしは、なぜ府立植物園のなかに神社があるのか、とかがえた。すると、一瞬、頭のなかで花火が散った。そうだ、京都府立植物園は、もとは半木神社の鎮守の森だったのだ。その鎮守の森を潰して植物園とし、桜林、梅林、榎の林、椿の林というようにゾーニングしてしまった、つまり「都市計画」したのである。

じっさい、あとで調べてみて、ここは昔、八坂神社の境内だったことがわかった。半木神社はその攝社だったのだ。あるいは元々、半木神社の境内だったかもわからない。八坂神社は後からやってきたのかもしれない。いずれにせよ、これで植物園のなかに神社のある謎は解けた。

とどうじに、この公園のような植物園が自然でないこともわかった。「自然の森」は、なかにある鎮守の森だけなのである。

## 五 「社会の森」

日本は、集落のあるところにならず神社がある。そして神社のあるところに、たいい森がある。だいたい鎮守の森は、集落の裏山などにあって、その集落を見下ろすような場所に立地しているケースが多い。まさに村を見守っている、という感じである。



写真3 春日神社(奈良)の奉納の舞

「ムラとヤシロ」の章で報告したように、わたしが福井県若狭の美浜町で調べたところでは、三三の鎮守の森のうち、半数以上の一七が裏山型<sup>おくつき</sup>だった。あとは奥城型が四、集落周辺型が四、森型が三、集落内型、岬型が各二、家屋内が一だった。

また集落の人々は、日ごろからみんなで鎮守の森を整備している。鎮守の森を守っているのである。そして、人々はその鎮守の森によって、また守られているのである。すくなくとも、過去五〇〇年、一〇〇〇年、二〇〇〇年というのは、そういうことであった。集落の取り決めの文書は、みな鎮守の森の社に奉納された。鎮守の神は、集落に団結と秩序を与えてきたのである。

そして人々はその感謝の印として祭をおこなう。春や秋の祭には、巫女が舞いを奉納したり、舞楽を奏したりする。さまざまな芸能が登場して、鎮守の森の神に捧げられる。これらはすべて、昔の日本の民俗芸能を示す「文化財」となっている(写真3)。

このようにみえてくると、鎮守の森は文化財的存在、さらにそれが、祭りという形で現在も息づいている文化的存在、いいかえると「文化の森」といえるのではないか。

## 六 鎮守の森には何があるか

では、その鎮守の森のなかに、いったい何があるのだろうか。はたして神様がいるのだろうか。たとえば、人が寺に参るのは、仏像を拝むためである。仏像を前にして、人は貢金をあげ、

そして拝む。では神社にも、そういう仏像にかわる神像のようなものがある、わたしたちはそれを拝みにいくのだろうか。

たとえば、伊勢神宮は日本の代表的な神社であり、鎮守の森だが、そこでは人はいったい何を拝むのだろうか。伊勢に参っても、人はふつう垣の外から手を合わせるだけで、なかを見ることはできない。垣が三重にまわっていて社殿すら拝めない、まして「神像」があるかどうか、知る由もない。ただ垣の外から寮銭をあげて、柏手を打って帰ってくるだけだ。たしかに正殿の下に「心の御柱」とよばれる神聖な柱があるが、しかしそれも拝む対象ではない。それは、その上に神殿を建てるためのたんなる目印にすぎない。であるから、次の式年遷宮に予定された隣の敷地に立っているもう一本の「心の御柱」を誰も拝まない。

では神殿のなかに何があるのか、というと、ここには八咫鏡<sup>やたのかがみ</sup>がある、とされる。しかし、その鏡は神体なのだろうか。とおもって『古事記』や『日本書紀』を読んでみると、天照大神が天孫瓊瓊杵尊<sup>にぎみこと</sup>と別れるときに、この鏡をあたえて「これを見て私をおもいだしなさい」といった、という。しかしふつう鏡を見ても、映るのは自分の顔だけである。鏡はたんに反射するだけのものでしかない。鏡がなければそこには何も無い。いわば鏡は依代である。現代風にいえばメディアである。つまりテレビのブラウン管のようなもので、電波が送られてこなければ何も見えない。そんなもの自体が神体であるはずもなく、拝むほど有難いものでもない。

じっさい、伊勢の八咫鏡は別としても、どこの神社にもある鏡は、神主がそのへんのスーパーで、一枚八〇〇円ぐらいで買ってきた代物である。けっして高価なものでもない。

ここに寺と神社との根本的な相違がある。寺には確かにそこに拝むべき対象があるけれど、鎮守の森のなかの宮には、拝む対象は、じつはないのである、そこにある鏡は、たんに何かを写す道具でしかない。アマテラスオオミカミとニギノミコトなら、祖母と孫との関係だから、お互いに顔が似ていて、ニギノミコトは自分の顔を見てアマテラスオオミカミとおもったかもしれないが、アマテラスとわれわれ庶民とでは、ぜんぜんかけはなれている。とすると、鏡に映るほかに何があるのだろうか。

## 七 墓を拝む

古い杜を調査していきときおもうことだが、ヤシロから拝む方向に墓がある、というケースがけっこう多い。たとえば、「海と若狭の神々」の章で述べたように、福井県の西のほうの日本海に面した若狭は、おそらく日本の古い民俗のいちばん多く残っている地域のひとつだが、その加茂神社では、神社を拝む方向の先に福井県最大の横穴式石室をもつ加茂北、加茂南古墳をはじめとする二四基の古墳がある。さらにその神社の故地、といわれる昔の神社跡に立っ

て現在のヤシロのほうを見ると、川があって 橋があって、大きな楠の木があって、舞殿があって、そして現在の社殿がある。そしてその遥か向こうに、これらの古墳群がある。そしてそれらがすべて一直線上に並んでいる（写真4）。すると、社殿のなかにおかれた鏡は、まさにそれら古墳を透かしてみせるブラウン管のように見える。

先に調べた福井県美浜町の鎮守の森では、三三のヤシロのうち八つのものが、参拝軸上に古墳をもっている。これは偶然というにはあまりに数が多すぎる。むしろこれらの古墳を拝むべく、ヤシロが建てられた、とかんがえてもおかしくないのではないか。すると、ヤシロを参拝することが、これらの古墳を遥拝することになる。そのばあい、ヤシロは、その遥拝の方向を示すサインでしかない。鏡はそういう遥拝の方向を示すシンボルなのであろう。



写真4 橋、ケヤキ、舞殿が一直線に見える下中加茂社（若狭）

そういうことをいろいろ調べていくと、沖縄にその原形のようなものがあることに気付く。沖縄では、集落のなかに、しばしばカミアシャゲといわれるものがある。本土のお旅所にあたるもので、祭のさいにいろいろの神事がおこなわれ、芸能が奉ぜられる。とどうじに、そこから村の御嶽うたきを遥拝する。ウタキは本土の神社にあたるものである。そのウタキにはお通しウタキと本ウタキがある。お通しウタキはそこから何かを遥拝する、まさに遥拝所である。ところが、その遥拝所自身が、またカミアシャゲなどから遥拝される。また本ウタキとよばれるものは、神アシャゲからも、お通しウタキからも遥拝される。なかにおどろおどろしい空間があって、しばしばそこからは人骨などがでてくる。つまり、そこがかつて墓地であったことをしめす証拠である。ということは、遥拝の対象がじつは墓である、ということを示すものではないか。

## 八 山を拝む

ヤシロで何を拝むか、というときによく引き合いにだされるのは、奈良県の大神神社おおみわである。このヤシロでは鳥居があり、拝殿があるけれども、本殿はなく、かわりに人々は三輪山を拝む。三輪山は大和盆地のなかの秀麗な山で、古来から人々の信仰を集めてきたが、その山を神体と



写真6 一言主神社（若狭）

することで、大神神社は有名である。神体として拝まれる対象となる山を神体山というが、三輪山はその神体山の典型である（写真5）。

このように、ヤシロに拝殿はあっても本殿がなく、ということは神体を容

れる建物がなく、かわりに山を神体とするケースであるが、それは珍しいことのようにいわれる。しかし、じつはこれこそがヤシロのあり方の本来の形を示すものである。じっさい若狭にはこういうケースがいくらかでもある。さきの加茂神社も、古墳の先にはじつは山がある。三角山といってこれも円錐形の神体山である。神社と古墳と山とが一直線になっているのである。また三角山の山麓には、三角山そのものを遥拝するヤシロがある。彌和神社という。奇しくも先のオオミワ神社と同名である。しかし、それはきわめて簡素なものだ。道路のそばに灯籠があって、なかに玉垣に囲まれた小さな四畳半ぐらゐの空間があって、それで終りである。その前で人々は拝むが、何を拝むのか、というと、三角山を拝んでいるのである。

しかし、三角山を拝むヤシロはこれだけとはかぎらない。おなじく、その別な山麓に一言主神社がある。彌和神社よりはもうすこし立派である。鳥居があって、山のほうに石段がつづいていて、階段をあがっていくと参道のさいごに森がある。しかし建物はなにもない、森の前に、彌和神社と同じように玉垣でかこまれた八畳敷ぐらゐの広さのところがある。そのなかに岩が



写真5 三輪山に太陽が昇る



写真7 青葉山の遠景（若狭）

ひとつ立っている。しかし、その岩も拝む対象ではない。ただ拝む方向を示しているだけのものだ。ちょうど鏡のようなものである。人々はそこから、やはり三角山を拝む（写真6）

また、若狭富士という名前のある若狭海岸近くの青葉山は、きれいな三角形をした秀麗な山だけれど、見る角度によっては、ラクダのコブのように峯が二つあったりして、かならずしもきれいとはいえない。ところが、おもしろいことに、この青葉山のいちばんきれいに見えるところに、青葉神社が建っている。神社のあるところが、青葉山がいちばん美しく見えるところなのである（写真7）。そして、そこから青葉山をみる視線の途中に、古墳がある。ヤシロと古墳と神体山とが一直線になっている。さきの彌和神社とどうようである。これが神社の原初的な形ではないか、とおもわれる。このばあいも、大切なのは墓より山のほうであって、おそらく山がいちばん美しい、と思われるところに遥拝所を建て、そこから山を見る視線上の山麓に墓をもうけたものであろう。そうすると、墓と山とを同時に拝むことができるからである。

つまり日本の古い神社には、神社そのものに何も拝む対象がなく、ただそこから遠くの墓を拝んだり、山を拝んだりする遥拝所だ、ということがわかるのである。

## 九 海を拝む

鎮守の森のなかには、このように墓を拝む、山を拝む、というケースが多いが、ほかに、海を拝む、というケースもある。有名なものに伊勢の二見ヶ浦がある。二つの石の間にかけた綱



写真8 二見ヶ浦（伊勢）

とシデの海上の向こうに二見興玉神社の奥社が見えるようになっている。二見ヶ浦は、そのヤシロを拝む鏡のようなものである（写真8）

若狭には、海岸沿いに崖が多く、その崖の上にはし



写真9 和田の弁天（若狭・美浜町）



写真10 海に向かう遥拝所（志賀の海神社）



写真11 鵜戸窟から日向灘へ（鵜戸神宮）

ばしば祠がある。その祠の向こうには水平線があり、そのヤシロを拝むと海を拝む、というケースが多くある。美浜町の「和田の弁天」といわれる胸肩神社はその典型的なものである（写真9）。この神は海からやっ

てきた、という伝承があるように、漁師たちの篤い信仰をうけている。そして漁師たちの海からの目標、つまりヤマになっている。北九州でも、博多湾の海の中道の先端にある志賀の海神社は、海の神である宗像三女神を祀って有名だが、社殿はかならずしも海を向いていない。かわりに海を拝むためにつくられた遥拝所がある（写真10）。柵で囲まれたなかに鳥居が立っていて、その向こうはぜんぶ海になっている。ここでは、むしろ遥拝所が先にあり、あとになって海神社が祀られたのではないか、とはかんがえられる。いまは攝社のようにになっている遥拝所だが、本来はこの地の漁師の信仰をうけた神なのであろう。

また宮崎県に鵜戸神宮がある。ここの参道は、峠の上から始まってだんだん海のほうへ下りてゆく。最後に海岸にまでくる。そこに洞窟があり、なかに社殿がある。洞窟のなかに入って社殿を拝む。その方向は陸であるが、社殿を拝んでふりかえると、洞窟の穴の向こうに海が見え、潮騒が聞こえてくる。日向灘だ。こうして洞窟の穴から見る海はまた格別である。そして人々は洞窟を出て海を拝んでいる（写真11）。

変わったところでは、大阪の四天王寺に面白い例がある。境内の西門に鳥居が立っている。その鳥居は西を向



写真12 四天王寺西門（大阪）

いている。西のほうの遙かなたは海である。夕日が落ちていくころ、西の海は明るくなる。ちょうどそれを拝むように、鳥居がつくられている。寺でも海を拝む、というところが面白い(写真12)。

以上のように、海を拝む信仰は各地にずいぶんある。その元をたどっていくと、これもやはり沖縄にいたる。沖縄には<sup>せいゐょうたき</sup>斎場御嶽という有名なウタキがあって、ウタキのもっとも始原的な形を伝えている。なかに入ると、人々はあちこちのイビ、すなわち遥拝所で拝んでいる。そしてさいごに大きな岩にぶつかる、岩に三角の隙間があって、その隙間のなかに入ってこの拝所で拝む(写真13)。そのあとふりかえると、樹々のあいだから海がみえる。よくみると、その海の向こうに久高島がみえる。沖縄第一の神聖な島である。かつて沖縄を支配した尚家の故地でもある。人々はさいごに、その島を拝む。



写真13 斎場御嶽(沖縄)

このように海を拝む、ということは、いまのべたように本土にかぎらず、沖縄にもしばしばみられることである。というか、沖縄にはその始源の形がある、というべきであろう。というのも、さらに沖縄には、個別の神社の個別の事例だけではなく、一般に、海の彼方にあるニライカナイという聖地を礼拝する、という信仰がある。これは天を拝む、という本土のシャマニズム信仰と、まったくオリエンテーションを異にするものである。海を拝むということは、いわば、本土の天を尊しとする「垂直信仰」にたいして「水平信仰」といえるものであろう。

## 一〇 海から拝む

さて、このように陸から海を拝む、ということのほか、逆に、海から陸を拝む、ということもあった。たとえば葛飾北斎の「波裏の富士」も、昔の漁師の信仰を絵にしたものといえるだろう(図1)。また静岡県の沼津市金桜神社に奉納されている絵馬をみると、山の上に宮があって、鳥居があって、



図1 北斎の「波裏の富士」

海では網漁をしている漁師がいる。その漁師に覆いかぶさるように山や宮がある。というのも、漁師は陸上のポイント二つを見通して直線を描き、もうひとつ別のポイント二つを見通して直



図2 金桜神社（沼津市）の絵馬



写真14 巖島神社

線を描いて、その交点で自分の場所を知る、いわゆる「山見」とか「山立て」をするからである。そのために、いつも陸上にランドマークを設けなければならない。山も宮も、多くがそのランドマークになっている。それは漁師にとっての「命綱」である。そのことをこの絵は示している（図2）。

そういう状況を、沖縄の古歌のオモロが示してくれる。たとえば「ハンゴ豊森、キシオ玉水、それを拝んで舟を走らせよう（中略）キャラン獄を目標にして拝んで舟を走らせよう」（オホリノオモリ）などという舟歌があるのがそれだ。ハンゴ豊森、キシオ玉水、そしてキャラン獄などというものは、みなウタキ、すなわち神社である。神社は海からの目標であり、拝む対象なのだ。そういう姿勢を徹底的に建築したのが、安藝の巖島神社である。巖島神社では、神の乗った舟は海からやってきて、海のなかの鳥居をくぐって、社殿にいたる。そして祭が開催される（写真14）。

## ―― 岬宮から田宮へ

さきにものべたように、沖縄の信仰では、神は、海のかなたのニライカナイという聖地からやってくる。ところがその神の来臨のし方をみると面白い。まず、神はしばしば岬にあるウタキに第一歩を印す。そこがいわば「岬宮」である（写真15）。そこから内陸の高い山が見通せる。そこには山宮にあたるウタキがある。そして里に目を移すと、麓に里宮のウタキがある。

さらに田んぼのなかに、あるいは平地の集落のなかに、田宮がある、あるいはお旅所がある、さきのカミアシャゲである、といった具合に展開する。それらが互いにぜんぶ見通せる構造になっている。つまり遙拝可能な構造になっているのである。ということは、まず神は海から岬にきて、次に山に昇り、里に降り、田に至る、つまり集落に来るのである。すると、こういう神の来臨という形で、日本の社の連鎖構造ができあがっていることがわかる。神がお帰りになるときは、この動線を逆にたどる。そしてそれが、ふだんに人々の拝む方向でもある。



写真15 日御崎の経島（出雲）

これは沖縄だけではない。若狭においても、以上のように見てきたとおりである。たとえば美浜町の和田の集落にある常神社は、海がよく見通せる山の上に建っている。そしてその常神社を拝むと、その方向には天王山の前山があり、そこに古墳時代の木野古墳群がある。さらにその遙拝軸線を延ばすと、宮代の集落の彌和神社にぶつかる。これはこの辺りの神体山である御嶽山の里宮である、あるいは遙拝軸線を広げると御嶽山そのものにぶつかる。こういう例は若狭には数多い。さきの加茂神社 - 加茂北・加茂南古墳 - 三角山、あるいは大飯町の静志神社 - 古墳群 - 父子山などである。

また目を本土一般に広げると、たとえば青森県鮎ヶ沢町の岬には岩木山の遙拝所がある。もちろんその岬は海からよく見え、海からの目標になり、海から拝まれるところである。そこから岩木山を遙拝する。岩木山はそれ自体が山宮である。その岩木山は、山麓に多数の里宮をもち、また津軽平野一帯の村々には多数の田宮がある。それらが、しばしば岩木山 - 里宮 - 田宮というふう一直線につながる。

## 一二 ニライカナイを遙拝する

以上のような順序で、神は、海から人々の集落までやってくる、とかんがえられるが、それを逆にたどると、つまり田宮から里宮、山宮というふうには拝んでいくと、けっきょく最後は海のかなたを拝むことになる。すると、日本の古い神社では、人々が拝んでいるのは、最終的には海のかなた、沖縄の人々のいうニライカナイという楽土だ、ということになるのではないか（図3）。

ただし、本土の人間は、もうそのことをすっかり忘れてしまっている。いまでは辛うじて、沖縄にその原形が残されているにすぎない。ただ、本土に辛うじて残っている痕跡を調べてみたのが、さきの若狭の一部である福井県三方郡美浜町内の神社の分布とその拝殿の向く方向、つまり参拝の方向をプロットしたものである（ムラとヤシロの章図5）。これをみると、海岸べりの神社の参拝は多く海の方を向いている、あるいは手近かにある丘や裏山を向いていることがわかる。いっぽう河川ぞいの神社のそれは、そのあたりの有名な山に向かい、その山が海からの「<sup>しめやま</sup>標山」すなわち海からの目印となる神体山であるケースが多いことがわかる。つまり神社が内陸へ入れば入るほど、参拝の方向は、海から見えるような高山に向かっていくのである。

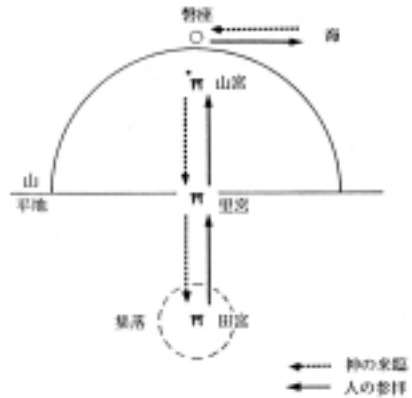


図3 神の来臨と人の参拝の方向

またこういうこともある。金沢市の港の近くの日和山には、大野湊神社のお旅所がある。海を拝むためである。変わったところでは、いまほど市街地が建てこんでいなかったときの堺の大和川の河口あたりから、金剛・生駒山地の切れ目を通して奈良盆地の三輪山が望見された、という。逆にいえば、三輪山から大阪湾が見えたのである。これらは、わずかに残されている神社と海との関わりをしめす痕跡だ。しかし、そういう形での海の遥拝が、いまでも日本人の意識の根本にあるのではないか。その形が少し変わって、日本人は好んで海辺から、あるいは山の頂きから御来光を拝む。また正月三ヶ日に何千万もの人々が、惹かれたように神詣でする。これらもかんがえようによっては、山や海を遥拝する行動の代替といえるのではないか。

### 一三 都市の聖軸

そこで、現代にたちもどってかんがえてみよう。そうするとわたしは、これからも鎮守の森というものが都市の聖標になりうるのではないかとおもう。なぜかという、現代においても、さきにものべたように祭の日には、多くの日本人が神社に参る。そのときに神社でおこなわれる祭は、たいいてい、



写真16 富士山

地域住民のボランティアである。しかしそれはたんなるボランティアではない。そのボランティアの行為を通じて、地域の人々が、日常的にどこにどういう若者がいるのを知ることができる。すると、これは地域にとっては一種の防災訓練とっていいものである。昔は軍事訓練でさえあったのである。じっさい、こういう祭をやっていると、洪水とか、火事とか、地震とかの非常のときに、共同体制がとりやすい。これは地域共同体にとって、たいへん重要なことではないか。そのために、日ごろから訓練しているのが祭である、という考え方ができるのである。こういうコミュニティの核としての鎮守の森がなくなると、コミュニティそのものが失われていく危険性がある。

そのほか、神社には神木がある。こういう神木があることによって、田んぼのなかからでも、海の上からでも、人々はみずからの位置を知ることができる。またその木が伐られない、ということによって、いつまでも集落のシンボルでありつづける、といったことも大切だろう。

富士山は日本を代表する山である。どうじに全国には 富士とよばれる山がたくさんあって、それぞれ地方のシンボルになっている。富士山に代表されるそういう山に対する信仰が日本人の昔からの信仰であり、価値観でもある。その最大の理由は、そこから海を拝むことができるからだ。そして、そういう山を拝む場所として、村や町における、あるいは都市における鎮守の森の意味がある。とすると、都市の鎮守の森から聖なる山をみる視線というものは、たいへん大切なものである。それはこれからも大切に、みだりに壊さないようにしなければならないのではないか。

こういう、日本人の古来の信仰からすると、かならずしも平地に墓をつくる必要などないのだ。それは江戸時代ごろから流行しだした火葬墓の儀礼でしかない。墓は、昔からの日本文化の観点からすれば、みな山の麓につくられるべきものである。あるいは山そのものを墓にする。それが日本人の古来からの埋葬のあり方なのである。

そうであるなら、いまある平地の墓地はみな不要のものとなる。そこで、いっそのさい、全部鎮守の森にしてはどうだろう。そしてそこから人々が山を遙拝する視線を壊さないように、市街地の建築を制限してゆくのである。そうすると、市街地の建築物がどれだけ新陳代謝を繰り返しても、鎮守の森と、鎮守の森から山を遙拝する視線とだけは、永遠不動のものとして残される。その「永遠」を壊さないように、いつの時代にも都市の新陳代謝を行なってゆけば、都市はいつまでも、人々の愛着のこもる姿として残されるのではないか。

じっさい、イギリスの首都ロンドンの都市計画では、郊外のハムステッド・ヒースの「コンスティチューション・ヒル」やリージェントパーク近くの「プリムローズ・ヒル」などから、聖ポール大聖堂と国会議事堂のピックベンを見る視線を壊さないようにすることがその骨格になっている。そのために、これらのポイントから扇状形の地域に、厳重な市街地の高さ規制が

行なわれている。おかげで、この二つの「市民のシンボル」は、ロンドン中の主だった場所からいつも見ることができる。「タスコのルール」は、現代のイギリスの都市計画に実行されているのである。

そこで、イギリス国教会の教えや議会制民主主義を立国の基礎とするイギリスとは違って、自然と共生する文化を基本とする日本では、鎮守の森と、鎮守の森からみる山の視線を「都市の聖軸」としてはどうか。それが、日本の都市の構造のあり方を決定する「見えないシステム」になるのではないかとわたしはかんがえるのである。